

レポートライティングの問題設定において相互レビューは有効か

鈴木 宏昭（青山学院大学教育人間科学部）

鈴木 聡（青山学院大学ヒューマンイノベーションリサーチセンター）

問題構築的読みにおける感情と直感の役割

レポートライティング、特に主張型のレポートの作成においては、問題設定と論証の2つが必要となる。問題設定とは「何を」書くのかに、論証とは「どう」書くのかに対応する。一般にレポートの書き方に関するテキストでは、論証に関わる記述は豊富になされる一方、何を書くのかについての記述は非常に少ない場合が多い。多くの学生が漠然とした関心以上のものを持っていない状況を考えると、取り上げるに値する問題を作り出すことを支援する必要性は高いと考える（鈴木, 2009）。

問題設定において重要なことは、関連文献の「問題構築的読み」であると我々は考える（鈴木・鈴木, 2009）。問題構築的読みとは、自らの問題を定式化するために関連する文献を読むことを指す。より具体的には、文献中の情報に対して主体的な判断を行いながら、自分のレポートで取り上げる問題の候補を見つけることを主目的とした読みである。これは作者の主張を正確に理解するという受容型の読みとは全く異なったものである。

問題構築的読みにおいては、直感的、感情的判断であると我々は考える。一般にレポートライティングにおいてこれらは抑制されるべきものであり、慎重なプランの下でのみよいレポート作成が可能になるとされている。しかし、問題設定プロセスの初期に必要な「気づき」においては、「おもしろい」、「なんか変だ」、「嫌な気がする」などの直感や感情ベースにした判断がなされる。その後、これらを分析的に検討し、問題が定式化されると考えられる。

問題構築的読み支援ツール, EMU

我々は、こうした知見に基づき、感情タグとマーキングによって問題構築的読みを支援する Web ペースのシステム, EMU (Emotional and Motivational Underliner)を開発し、運用している。

EMU には大きく分けて、マーキングの機能と協調のための機能が用意されている。利用者は、テキストの一部に対してシステム側で用意された感情表現にもとづく 5 種類の感情タグ、およびメモ(任意)とともにマーキングを付与できる。感情タグは、戸田山 (2002) をベースにした 5 つ (へえ, そうそう, ムカッ, ??, ここ大事) を用いた。EMU には学習者同士でマーキング情報を共有し、協調学習を促す機能も備わっている。共有方法は「ある 1 人の他学習者のマーキング情報の閲覧」、「複数の学習者のマーキング情報の重ね合わせによる閲覧」の 2 種類からなる。いずれの共有方法においても、他学習者のマーキングに対してコメントを残し、そのコメントも学習者間で共有できる。

EMU のこれら 2 つの機能は、まずマーキングにより直感的、感情的判断を臆することなく表出することを援助し、次に他者とのインタラクションを行わせることで初期の判断を洗練させるという考えの下で実装されている。

EMU の協調機能の効果

これまでの研究から EMU のマーキング機能を用いることで、文献に対する批判的、懐疑的意見の産出が促進され、結果としてよいレポートの作成につながる事が明らかにされている（鈴木・白石・鈴木, 2009）。以下では、EMU の協調機能の効果を検討する。特に、自分が残したメモに他者がコメントを行う部分に着目し、コメントとレポートの得点との関係を分析した。

利用状況: 教職課程科目を履修する学部3, 4年生26名が授業の一環として参加した。1週目でEMUの利用の仕方についての簡単な説明を行った後、格差社会に関するテキストを、EMUを用いてマーキングおよびメモをしながら読ませた。宿題として、他のメンバーの書いたメモに対して、コメントすることを課した。なお他の人に対して必ず1つのコメントを書くように求めたので、一人最低でも25のコメントを書くことになった。2週目では、自分のメモに対する他者からのコメントをよく読んだ後に、元々のテキストについての意見文をまとめさせた。

評価方法: メモへのコメントを文の長さによって得点化した。1文につき1点とし、3文以上のコメントはすべて3点として計算した。これは一般に長いコメントはよいコメントが多いことを反映している。意見文については2名の採点者が5点満点で採点し、その平均をとった。

結果: まず学生ごとに書いたコメントの得点を合計し、その人のコメント得点を求めた。その上で、中央値を基準にして、よいコメント作成者と悪いコメント作成者の2つのグループに分け、各々のレポートの得点を比較した。その結果、よいコメント作成をした人(平均 3.42)が悪いコメント作成者(平均 3.03)よりもよいレポートを書くわけではないことが明らかになった($t(23.8)=1.13, p=.27$)。

次に、よいコメントを数多く受け取った学習者とそうでない学習者の間にはレポートの得点に差があるのかを、同様の分類の上で検討した。その結果、よいコメント取得者と悪いコメント取得者のレポート得点を比較したところ、両者の間に有意な差はみられなかった(平均 3.50 vs. 2.96, $t(23.4)=1.62, p=.12$)。

同様の分析を意見文の成績に基づいて行った。すなわち 1) よいレポート作成者はよいコメント書くのか、2) よいレポート作成者はよいコメントを受けているのかについての分析を行った。前者については、よいレポート作成者はよいコメントを残す傾向があるが(平均 61.6 vs. 45.2, $t(14.8)=1.83, p=.09$)、後者についてそうした傾向は見られなかった($t(19.2) < 1$)。

まとめ

本研究ではレポートライティングにおける問題設定的読みを支援するツール、EMUを紹介した。そしてこれの協調機能を用いた、学生同士のインタラクションが、その後に作成するレポートの出来に関係するか否かを検討した。この結果、よいレポート作成者は他者に対してもよいコメントを残すが、よいコメントたくさんもらった人が必ずしもよいレポートを書くわけではないことが明らかになった。

後者の結果は以下の研究の必要性を我々に示している。まず現在のコメント得点の算出方法を再検討である。一般に長いコメントはよく考えられたコメントが多いが、すべてがそうであるわけではない。よってメモやコメントの質を加味した評定方法を検討する必要がある。また、秀逸なコメントがなされているが、それがレポートには反映されないケースも少なからず存在する。このことは、コメントがどのように理解されるのか、またそれに基づいてどのような修正プランが生成されるのかについての詳細な分析の必要性を示唆している。

参考文献

- 鈴木宏昭(編)(2009)「学び合いが生み出す書く力」丸善プラネット、
- 鈴木宏昭・鈴木聡(2009)直感と協調を利用した大学生のレポートライティング支援の試み。人工知能学会研究会資料 SIG-ALST-A902, 43 - 48.
- 鈴木聡・白石藍子・鈴木宏昭(2009)マーキングと感情タグの付与によるライティング活動における批判的読解の誘発。情処研報 2008-CE-98, Vol.2009, No.15, 97 - 104.
- 戸田山和久(2002)「論文の教室: レポートから卒論まで」NHK 出版。